

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 47

- 第25回 学術集会のご案内
第26回 学術集会のご案内
寄稿 清木元治 名誉会員（金沢大学）
夏越祥次 新理事（鹿児島大学）
越川直彦 新理事
（神奈川県立がんセンター臨床研究所）
第21回 研究奨励賞募集案内
会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第25回日本がん転移学会学術集会/総会の案内

会 期 : 平成28年(2016年) 7月21日(木) ~22日(金)

会 場 : 米子コンベンションセンター(米子駅前)

テーマ : “がん転移制御の未来 –臨床から基礎へ–”

おもなプログラム

* 特別講演 : 光富哲哉(近畿大学医学部 呼吸器外科部門)
「転移性肺癌に対する分子標的治療の現状と今後」

* 教育講演 : 押村光雄(鳥取大学医学部)
「がん転移研究に繋ぐ人口染色体技術(仮題)」

* シンポジウム

- (1) がん転移の新しい治療標的としてのエクソソーム研究
- (2) がん転移分子基盤 ~実験病理からのアプローチ~
- (3) 炎症と転移 ~がんの進展と転移における炎症・微小環境の役割~
- (4) アンメットニーズに対する転移研究 ~臨床医からのメッセージ~

◆会議予定◆

理 事 会	7月20日(水)	18時00分~		
評議員会	7月21日(木)	12時15分~	米子コンベンションセンター6階	第7会議室
総 会	7月21日(木)	13時15分~	米子コンベンションセンター1階	第1会場

【第25回学術集会/総会事務局】

鳥取大学医学部 分子制御内科学(担当:武田 賢一)

〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1

Tel:0859-38-6537 Fax:0859-38-6539

運営事務局:株式会社メッド

〒701-0114 倉敷市松島1075-3 Tel:086-463-5344 Fax:086-463-5345

ホームページ <http://www.med-gakkai.org/jamr2016/>

E-mail : jamr2016@med-gakkai.org

第26回日本がん転移学会学術集会・総会の案内

会 長 : 土岐 祐一郎(大阪大学 消化器外科)

会 期 : 平成29年(2017年) 7月27日(木) ~28日(金)

会 場 : グランキューブ大阪(大阪府立国際会議場)

テーマ : 微小転移の制御によるがんの根治を目指して

寄稿1：私のがん転移研究

清木 元治 名誉会員（金沢大学招聘特任教授/東京大学名誉教授）

がん転移研究会には発足した最初から参加させていただいた。しかし、当初、多くの先生方から「あなたは何をしてきたの？」とよく質問されたものだった。つまり、この分野では新顔だねということだ。実際、その当時には転移に関わる論文も学会発表もそれほどは行ってはいなかった。しかし、先輩の先生方に温かく受け入れられ、ご指導をいただいた。今回は、私のがん転移研究への関わりを遅ればせながら紹介する機会をいただいたようだ。

私の研究のスタートは、金沢大学大学院での吉川寛教授の指導による枯草菌のゲノム複製の研究だった。がん研究への本格的な取り組みは、その後、(財)癌研究会癌研究所（癌研）の吉田光昭先生（当時主任研究員）のもとで博士研究員として、ヒト白血病ウイルスの研究を始めてからである。当時の癌研は、大塚の古めかしい建物にあったが、菅野晴夫研究所長、井川洋二部長などの著名な先生方のもとで、日本のがん研究の中核がここにあるという存在感があった。

当時は、ATL（成人T細胞白血病）が日本で発見されたころであり、発症原因は未知のヒトがんウイルス（後にHTLV-1と命名）と疑われており、その同定を巡って日本と米国NIHのグループの間で熾烈な競争が始まっていた。私が引き受けた課題はATL細胞からウイルス遺伝子のcDNAをクローニングすることであった。現在の簡便なクローニング法からは考えられないような複雑なプロトコールを手渡されたが、周囲に経験者は誰もいなかった。加えて、ウイルスが本当にあるかわからない少量のRNAが貴重な資料として手渡された。通常は材料の品質をチェックし、cDNA合成の条件の検討を行いながら慎重に進めるべき実験である。しかし、戦闘モードの研究室であってその猶予はなく、確実性を保証する実験は後追いさせるという方針をとった。勝つための実験が求められていた。ほとんど最短で、世界で初めてのHTLV-1のcDNAクローンを手にすることができた。1982年のことであった。この情報を元にして、感染細胞から取り出したウイルスゲノムの全構造を解読して報告したのが1983年であった。当時の実験はとて大学院生に教えられるような着実な方法ではなく、それまでのトレーニングがあったからこそできた真剣勝負の実験だった。PCが存在しない当時、実験ごとに得たDNA配列は紙に書き、ウイルス由来の約1万塩基を目で選び出し、ゲノムの特徴を解析し、初めてのヒトがんウイルスのゲノム構造として1983年に報告した。ここまでの競争は我々の圧勝であった。しかし、その後はだんだんと米国チームの底力により、競争は激しく、厳しくなった。同じ米国チームはのちに、フランスチームとHIVウイルスを巡り、両国間の政治問題になるほどの競争を繰り広げたことで有名である。

HTLV-1研究は面白く、気がつくとも36歳になっていた。癌研では主任研究員になっていた。このままだと留学するチャンスを逃しそうだと思って、短期留学を決意した。エレノア・ルーズベルト奨学金を得て留学先に選んだのが転移研究で有名なランス・リオッタ博士（NIH）の研究室である。我が国の研究者にとって転移研究といえば、フィドラー博士や、ニコルソン博士が大変有名であり、日本人員などところもあって、多くの研究者が留学している。一方で、リオッタ研に留学をする人はほとんどなかった。がん生物学の面から見るとフィドラー先生が魅力的であるが、私は分子生物学が得意であったで、そのバックグラウンドを生かしたいと思っていた。当時、リオッタ先生による「浸潤の三段階説」を聞いて、各ステップに関与する分子を想定した仮説の組み立て方に大変興味を覚えた。我が国の転移研究は、フィドラー博士やニコルソン博士の門下生たちの活躍により流れが作られてきた。そういった意味では、がん転移研究者としてはアウトサイダー的であったのだろう。

リオッタ先生の研究室では、がん細胞の運動因子の研究を行った。といっても留学中に母校への教授就任が決まったので、正味10ヶ月程度の留学期間は周辺の研究に目を配りながら過ごすことにした。そこで目に付いたのがMMP研究であった。

当時のMMP研究に対して私が感じた疑問は、我々が知っているMMPは全てを網羅しているのだろうか？浸潤・転移にとって最も重要なMMPはどれであろうかということであった。そこで、帰国後には分子生物学の手法で、この問題に取り組むことにした。まずは、これまでに知られ

ていないMMPの存在を明らかにするために、MMP遺伝子間で比較的保存された配列に対して重複性をもった配列のPCRプライマーを設計し、浸潤性がん細胞由来のcDNAを材料として、新規遺伝子の網羅的クローニングを行った。その中の一つに、遺伝子産物のカルボキシ末端に細胞膜貫通構造を持つ膜型マトリックスメタロプロテアーゼ (MT1-MMP) があった。この発見は、がん浸潤の鍵となる酵素の発見として大きなインパクトを持ち、ウオールストリートジャーナルを始め海外のメディアでも取り上げられた。この成果が以後の自分の看板のようになって現在に至っている。

がんの基礎研究の真価はがん治療の達成によって証明されることが求められる時代となった。現在では、MT1-MMPの研究にも多くの研究者たちが取り組んでいる。このような研究を支援し、医療への還元を実現したいと考えている。

寄稿 2 : 近況報告

越川 直彦 新理事 (神奈川県立がんセンター臨床研究所)

平成27年6月より本学会の理事を務めさせて頂いております神奈川県立がんセンターの越川直彦と申します。事務局より寄稿の依頼が参りましたので、ここに近況報告をさせて頂きます。平成26年4月に前任地の東京大学医科学研究所(東大医科研)より新しく新築された神奈川県立がんセンター臨床研究所・がん生物学部の部長として赴任致しました。臨床研究所は1986年に開所され、平成25年11月に現在の場所に新築移設されました。がん分子病態学部、がん生物学部、がん治療学部、がん免疫療法研究開発学部、がん予防・情報学部の5学部で構成されています。がんセンターの特色は、総長が医師ではなく、情報工学分野の専門家でゲノム研究の第一人者の東大医科研の宮野悟先生が務められています。また、日本で5施設目の重粒子線治療施設を有し、特にがんセンター併設型の重粒子線治療施設は、世界で初めであり、重粒子線治療に必要な手術、併用する抗がん剤治療などすべてをがんセンターで受けることができます。

がん生物学部は私を含め常勤の研究員が3名、技官1、時限プロジェクトに関与する研究員や研究補助員を含め総勢9名の研究室となっています。当研究室の目標は、東大医科研に在籍時より着目していましたMT1-MMPによるがん悪性化進展の分子メカニズムを明らかとし、MT1-MMPとその周辺分子群を標的としたがん診断・治療法を開発しています。最も進んだシーズは、私が大学院生時代に見出した悪性がんの特異的に発現するラミニン γ 2単鎖を標的とした尿路上皮がんの新規診断法であり、現在、4~5年先の実用化を目指した臨床評価を企業、臨床グループと行っています。

また、神奈川県立がんセンターは腫瘍組織センターをもち、がんセンター病院で治療を受けた患者様より提供して頂いた様々ながん組織や血清が保管されています。本年度、これら臨床検体を次世代のがん医療や研究に有効活用する目的で、これらのがん組織や血清検体を用いる逆相蛋白質アレイ (Reverse Phase Protein Array: RPPA) を作製するためのアレイヤーを設置しました。RPPAアレイは抗体を固相化した蛋白質アレイと異なり、多検体のがん組織から抽出したライゼートや血清をスライドガラスに固相化したアレイです。スライドガラス上のがん組織や血清に含まれる目的蛋白質やその翻訳後修飾に対する抗体を用いたウエスタンブロットで検出することで、バイオマーカーの探索、腫瘍のクラス分け、がん標的分子探索、治療標的の決定などのハイスループットな解析が可能であることから、創薬研究、基礎、臨床研究へ応用性を持ちます。現在、平成28年度末の本格稼働を目指したRPPA解析の立ち上げを行っています。このように私達はがん制圧を目指した基礎的研究から臨床応用を視野に入れた研究を統合的に展開しております。どうぞ、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

寄稿3：がん転移に対する外科医の戦い

夏越 祥次 新理事（鹿児島大学 消化器・乳腺甲状腺外科）

私が外科医になり始めた1980年代では、手術の安全性がある程度確立され、根治を求める拡大手術へと目が向けられていた。食道がんでは頸・胸・腹部にわたる3領域リンパ節郭清、胃がんでは大動脈周囲リンパ節郭清が行われ始めた時期であった。色素や活性炭、あるいはradioisotopeを用いてリンパ流を観察し、描出されるリンパ節はすべて郭清するという勢いであった。当然手術時間は長く、出血量は多く、肺炎や縫合不全、腓液漏などの重篤な術後合併症の管理に追われる毎日であった。それでも患者さんを何とか助けたいという気持ちから、週末に洗濯をするために一時帰宅し、新しい着替えを持って来て、またしばらく病院に泊まり込むという生活であった。食道がんやリンパ節転移個数が28個の5年生存例や胃がんの大動脈周囲リンパ節転移個数が10個の5年生存例があると頑張った甲斐があったと思ひ、次の症例の術後管理に精を出していた。しかし、実際はそのような症例はまれであり、多くは2年以内に死亡していた。しかし、当時は化学療法や放射線療法もさほど効果はなく、手術が根治を得られる唯一の方法と考えられていた。

実際に病理診断でリンパ節転移がない症例でも再発例がみられるため、リンパ節転移陰性例に対し、リンパ節の追加切片を作成して転移の有無を検討した。その結果、どの臓器でも10%~20%に微小転移が検出された。病理診断が代表一切片で行われているため、別の切片に転移が存在すること、HE染色では数個以内の転移巣は見落とされることなどが考えられた。その後の免疫組織学的染色やRT-PCR法の登場により、リンパ節微小転移の頻度は高く、がんのリンパ節転移は予想以上に早期から始まっていると考えられた。したがって、手術を行う際には組織診断以上のリンパ節転移の広がり念頭に置いて、対処すべきと考えられた。

手術後に術後合併症を起こすと予後が不良になることが知られている。肺炎、縫合不全、腓液漏など合併症自体が予後に直接影響を及ぼすものもあるが、術後合併症により免疫低下をきたし再発の危険性が高まると考えられる。手術を施行するにあたっては、がんが残存しないように完全切除を行うとともに、過大侵襲にならないように、また過不足のないリンパ節郭清範囲の設定が重要である。各患者の術前状態から術後合併症をおこさない術式を選択することも必要である。近年、鏡視下手術が隆盛であるが、出血量が少なく、術後肺合併症の低下など手術侵襲を軽減できれば、予後の向上も期待できる。

最近、化学療法や化学放射線療法の進歩により、以前は治癒不能と考えられてきた進行がんや多臓器転移例の長期生存がみられるようになってきた。大腸がん肝転移はその代表であり、化学療法と切除により病勢コントロールが可能となってきている。胃がんでも肝転移が1個であれば切除により、予後の向上がみられている。また腹膜播種や腹水貯留例も腹腔内抗がん剤投与により消失し、手術可能になる症例がある。これまで手術だけでは到底太刀打ちできなかった症例が集学的治療を行うことにより、手術で勝負できる機会が得られるようになってきている。

「どのような治療選択が最も効率良くがん転移を制御できるか？」という命題はまだまだ続きそうである。化学療法では新規抗がん剤に加え、分子標的治療薬が次々に開発され臨床試験が行われている。放射線療法は機器の改良に加え、重粒子線や陽子線など新たな治療が始まっている。さらに免疫療法に関して、免疫チェックポイント阻害薬と呼ばれる抗PD-1抗体や抗PD-L1抗体が登場した。さてどのような治療をどのような順に用いると効果的か？各種の画像診断を用いて、これらの治療でがんの転移の完全治癒を確認することは、未だ困難である。したがって、残存するがんの転移巣に対して、外科治療は最後の砦として有効な手段には変わりはない。今後も外科医は根治を目指して、手術という武器を用いて、がん転移に対して戦い続ける必要がある。

第21回日本がん転移学会研究奨励賞募集

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、
選考の上、本学会学術集会において授与する

【募集期間】

平成28年4月1日～9月30日

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、
本会会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補業績は、将来の発展が期待される若手研究者(応募年度の4月1日現在
43歳以下)によるものとする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金(奨励研究費)は1件20万円とする。

募集要項・申請書等については、事務局までメール・Faxでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail: office-jamr@umin.ac.jp Tel/Fax 06-6971-7951

研究奨励賞受賞者一覧

	受賞者	所属
第1回	藤田 直也	東京大学分子細胞生物学研究所
	磯合 敦	旭硝子株式会社中央研究所
第2回	吉村 雅史	大阪大学医学部第二内科
	矢野 聖二	徳島大学医学部第三内科
第3回	伊藤 和幸	大阪府立成人病センター研究所
第4回	越川 直彦	スクリプス研究所/横浜市立大学
第5回	吉治 仁志	奈良県立医科大学第三内科
	軒原 浩	国立がんセンター中央病院内科
第6回	山本 博幸	札幌医科大学医学部内科学第一講座
	伊藤 彰彦	大阪大学大学院医学系研究科病理病態学
第7回	李 千萬	大阪大学大学院医学系研究科臓器制御外科
	板野 直樹	愛知医科大学分子医科学研究所
第8回	三森 功士	九州大学生体防衛医学研究所腫瘍外科
	隈元 謙介	福島県立医科大学第二外科
第9回	滝野 隆久	金沢大学がん研究所細胞機能統括
	狛 雄一朗	神戸大学大学院医学系研究科生体情報医学講座
第10回	菅原 一樹	大阪大学大学院医学系研究科
	川田 学	(財)微生物化学研究会微生物化学研究センター
第11回	加藤 幸成	産業技術総合研究所 糖鎖医工学研究センター
第12回	下田 将之	慶應義塾大学医学部病理学教室
	小泉 桂一	富山大学和漢医薬学総合研究所病態生化学
第13回	渡邊 リラ	第一三共株式会社
第14回	王 偉	金沢大学がん研究所腫瘍内科
	山本 真義	浜松医科大学第2外科
第15回	清水 史郎	慶應義塾大学 理工学部
第16回	早川 芳弘	東京大学大学院薬学系研究科 生体異物学教室
	福島 剛	宮崎大学医学部 病理学講座腫瘍・再生病態学分野
第17回	山口 英樹	国立がんセンター研究所 転移浸潤シグナル研究分野
	由井 理洋	Department of Surgery, UCSF
第18回	園下 将大	京都大学大学院医学研究科 遺伝薬理学
	谷口 博昭	東京大学医科学研究所 抗体ワクチン治療研究部門
第19回	泉 浩二	金沢大学 泌尿器科
	坂本 毅治	東京大学医科学研究所 人癌病因遺伝子分野
第20回	星野 大輔	神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん生物学部

日本がん転移学会会則

第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」 “The Japanese Association for Metastasis Research” と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市東成区中道1丁目3番3号、大阪府立成人病センター内に置く。

第3章 会員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いは次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

第4章 役員および役員会

第10条 本会に会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事1名を置く。

* 事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 会長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議委員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議委員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。

日本がん転移学会役員選任規程

第1章 役員を選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議委員会で行う。

第3章 理事の定数と選出方法

第4条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より約2名とする。

第5条 理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第6条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議委員会に提出する。

第7条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

第4章 評議員の選出方法

第8条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第9条 評議員の選出は理事会で行う。

第10条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第11条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第12条 法人会員評議員は理事会で選出する。

第5章 監事の選出方法

第13条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第14条 監事の選出は理事会で行う。

付則 1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。

2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。

3. 本規程の変更は理事会および評議委員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

4. 役員任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

日本がん転移学会役員選任規程細則

1. 個人会員理事の選出方法

1) 投票は原則として郵送とする。

2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

2. 個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

3. 評議員の資格

1) 3年連続して評議委員会を欠席した者はその資格を喪失する。

日本がん転移学会 顧問・名誉会員

顧問：菅野 晴夫	杉村 隆	(故)明渡 均	
名誉会員：愛甲 孝	入村 達郎	小林 博	(故)佐藤 春郎
(故)末舛 恵一	清木 元治	曾根 三郎	(故)田中 健蔵
田原 榮一	塚越 茂	(故)鶴尾 隆	新津 洋司郎
(故)螺良 英郎	(故)中村 久也	(故)磨伊 正義	宮坂 昌之
門田 守人	渡辺 寛	Isaiah J. Fidler	
功労会員：東 市郎	(故)阿部 薫	(故)尾形 悦郎	岡田 保典
小野 真弓	垣添 忠生	北島 政樹	(故)久保田 哲朗
久保田 俊一郎	桑野 信彦	佐治 重豊	清水 暁
高橋 俊雄	竜田 正晴	寺田 雅昭	豊島久真男
(故)馬場 正三	宝来 威	細川 真澄男	宮城 妙子
宮崎 香	武藤 徹一郎		

日本がん転移学会役員

会長：清水 英治 (25回)			
副会長：土岐 祐一郎			
前会長：伊藤 和幸			
理事：川田 学	越川 直彦	清水 英治	土岐 祐一郎
夏越 祥次	二口 充	第一三共(株)	大鵬薬品工業(株)
監事：太田 哲生	エーザイ(株)		
評議員：足立 靖	板野 直樹	伊藤 壽記	伊東 文生
井上 正宏	植田 政嗣	上原 久典	海野 倫明
大上 直秀	岡田 太	奥野 清隆	尾崎 充彦
片岡 寛章	加藤 淳二	加藤 靖正	北川 透
北川 雄光	北台 靖彦	国安 弘基	隈元 謙介
小泉 桂一	小林 浩	今野 弘之	済木 育夫
堺 隆一	坂本 修一	佐藤 博	澤田 鉄二
清水 史郎	高橋 豊	滝野 隆久	竹田 和由
竹之下 誠一	田中 稔之	谷口 俊一郎	谷口 博昭
中 紀文	中森 正二	西岡 安彦	西村 行生
馬場 秀夫	浜田 淳一	早川 芳弘	東 伸昭
樋田 京子	藤田 直也	松浦 成昭	松尾 洋一
三森 功士	向田 直史	望月 早月	森 正樹
八代 正和	安井 弥	安本 和生	柳川 天志
矢野 聖二	山本 博幸	矢守 隆夫	由井 理洋
横崎 宏	横田 淳	横山 省三	吉治 仁志
旭硝子(株)	協和発酵キリン(株)	中外製薬(株)	日本化薬(株)

(アイウエオ順)

事務局幹事：伊藤 和幸

(法人評議員については登録会員の中から各社より各1名選任される)
評議員任期：平成27年7月25日～平成30年/第27回総会まで
(第25-27回)

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6971-7951

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)	会員番号	
氏 名	生年月日	
勤 務 先	勤務先名称(部所属も記入してください)	
	〒	
	Tel	Fax
	E-mail	
自 宅	〒	
	Tel	Fax
	E-mail	
	雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅	
変更年月日	201	年 月 日 付で変更します
退 会 届	201	年 月 日 付でもって退会します
その他		

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====
[発行・編集]
日本がん転移学会事務局
Tel/Fax 06-6971-7951 (直通)
E-mail: office-jamr@umin.ac.jp
〒537-8511
大阪市東成区中道1-3-3
大阪府立成人病センター内
=====

2016.4